

# 一心寺かわら版

第三十四号 平成二十七年三月発行

ホームページ・フェイスブックは「持名山一心寺」で検索を

## イスラームを見つめる

後藤健二さんと湯川遥菜さんが、イスラーム国により殺害されました。世界中の人々が憤りを覚え、悲しみに暮れました。「イスラーム国」はイスラームのスニ派過激組織で現在イラクやシリアの一部地域を支配しています。二〇〇六年に前身組織が国家組織樹立を宣言。二〇十四年六月には預言者ムハマンドの死後にイスラーム共同体を指導する立場であるカリフを置くカリフ制の再興と「イスラーム国」樹立を宣言しました。

世界のイスラーム人口は十六億人、日本には礼拝堂（モスク）はおよそ九十あるとされ、その数は徐々に増えています。しかし、地域住民から反対もあり、開設は容易ではありません。九、一一以降、メディアでテロとイスラームが結び付けて語られ、危険で恐ろしいという誤ったイメージを抱かせていると言われます。

私たちがイスラームと聞いて頭に浮かぶことは何でしょうか。聖地に向かつての一日五回の礼拝、偶像崇拜の禁止、豚肉を食べてはいけない、女性は顔と手以外を覆っていること。また、女性への教育の必要性や平和を訴える活動が続けたために、パキスタン・タリバーンによって襲われたマララ・ユスフザイさん（下）がノーベル平和賞を受賞したことも知っています。しかし、私たちがイスラームについて考えることはそれほどない



のではないのでしょうか。そして、イスラームの問題は宗教の問題であるとも言われるのに、宗教者の声が伝えられることはほとんどありません。そこで『イスラームのこころ真宗のこころ』（狐野利久氏（真宗大谷派）著）などから、イスラームを宗教者の目から見ていきたいと思えます。

イスラームの宗教は、その教えを要約すると「六信五行」になります。六信とはアッラー、天使、啓典、預言者、来世、天命。万有を創造し、形成する唯一絶対の神アッラー。「天にある原簿」に書かれているものが、ムハマンドの意識にアッラーの啓示という形で下されたものが『クルアーン』（啓典は他にもある）。大天使ガブリエルからそれを誦むことを命じられ預言者となったムハマンド。来世は天国行きか地獄行きか最後の審判によって決められます。そして、すべてはアッラーの意志、慈悲の顕れであり、天命と信じることが六信ということになります。アッラーが「真の宗教はイスラームあるのみ」という意味は、一番大事な自分自身を神に渡す、神に任せることを教えるのが本当の宗教である、ということを示しているそうです。

五行とは信仰告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼。一日五回の礼拝は、体を清めて膝をつき平伏しメッカの礼拝堂に向けて行います（下）。礼拝は唱句「アッラーフ・アクバル」（アッラーは偉大なり）を伴う一連の動作より始まり、開扉章といわれる「慈悲ふかく慈愛あまねきアッラーの御名において―讚えあれ、アッラー、万世の主、慈悲ふかく慈愛あまねき御神、裁きの日（最後の審判）の主催者。汝をこそ我らはあがめまつる、汝に



こそ救いを求める。願わくば我らを導いて正しき道をたどらしめ給え。汝の御怒りを蒙る人々や、踏みまよう人々の道ではなく、汝の嘉し給う人々の道を歩ましめ給え」は必ず唱えられます。信仰告白とは「アッラーの他には神は絶対いない。ムハマンドは神の使徒である」と唱えること。断食はイスラーム暦九月（ラマダーン）の三十日間。日中太陽が空に昇っている間は、食べ物や飲み物を口にしてはいけません。故意にしたものでなければ断食を破ったことにはならないそうです。喜捨、富めるものが貧しいものを援助し、恵むのは当然のこととします。メッカ巡礼は、イスラーム暦十二月八日から十日にかけて、決められた方式と道順によつてカアバ神殿（下）にお参りします。ムスリムなら生涯に一度は巡礼をしなければいけません。ムハンマドが六三二年、自らの死期を悟つて自らメッカへの巡礼を呼びかけ、白衣をまとつてメディナを出発した時の「離別の巡礼」が前例となつて、今日まで継承されていると言われています。

さて、イスラームの宗教のせいで争いが起こつていると言われますが、それは次の『クルアーン』の言葉によるものでしょうか。

「汝らに戦いを挑む者があれば、アッラーの道において「聖戦」すなわち宗教のための戦いの道において堂々とこれを迎え撃つがよい。だからこちらから不義をし掛けてはならぬぞ」。ただ同時に「宗教上のことでお前たちに戦いをしかけたり、お前たちを住居から追い出したりした者どもでさえなければいくら親切にしてやろうと、公正にしてやろうと、アッラーは少しもいけなはいとはおっ



しやりませぬ」とも、「宗教には無理強いということは禁もつ」ともあります。この世にはイスラームの宗教を信じるものだけが存在するのではないことを認めており、戦いを仕掛けられたり、住居を追い出されたりしない限りは親切にすることをいっていません。

イスラームでは、ムハマンドを始めとするイスラーム教徒がユダヤ教徒やキリスト教徒から非難、迫害されたと受け取つていまず。おそらくユダヤ教徒、キリスト教徒には違つた言い分があるのでしよう。兄弟宗教でありながら、それぞれを認めず批判する流れは今に続いていきます。

「もしアッラーの下さる神兆に不信の態度を取るようなものがあれば、今に恐ろしい罰にあらうぞ。アッラーはその権限に限りなく、恐ろしい復讐の神におわします」という恐ろしい一面がアッラーにはあります。しかし「彼ら、早くアッラーの方に向きなおつて（改悛して）お赦しを請えばいいのに。アッラーはなんでもすぐお赦しになる情け深いお方なのに」と、不信の態度を改めれば許されるとあります。また、「生命には生命を、目には目を…歯には歯を、そして受けた傷には同等の仕返しをと。だが被害者がこの報復を棄権する場合、それは一種の贖罪行為となる。アッラーが下し給うた聖典に拠つて裁き事をなさぬ者、そういう者どもは全て不義の徒であるぞ」とあります。

この「目には目を…」は、ハンムラビ法典や旧・新訳聖書にもあります。これは、同害報復せよというものではなく、「目をつぶしてしまつた罪には自らの目で償う」という、過度な報復を防ぐため





の法でした。そして被害者が復讐心を放棄するなら、一種の贖罪になると教えています。しかし、そのように教えても、ユダヤ教やキリスト教に不信感を抱いているムスリムには、とうてい受け入れられないでしょう。

佐々木良昭氏は著書の『日本人が知らなかったイスラム教』で、「人の命を平気で奪う、テロリストたちの極端な思想の裏側には、いったい何が隠されているのだろうか。第一にパレスチナ問題を代表とする土地（領土）問題があげられる。アラブはほとんど砂漠だらけ、人間の住める土地はほんの少ししか存在しない。パレスチナ問題はその土地問題の典型であるが、アラブ世界には、これと似た土地をめぐる問題が各所に見られる。そこでは、本来の土地所有者が侵入者によって、自分の土地を奪われ、自分の妻子、兄弟が無残にも殺されるといふ悲惨な出来事が何度となく、現在もなお繰り返されてきている。そういう環境の中で、幼少期を送ってきた子供たちは、「目には目を歯には歯を」ではないが、知らず知らずのうちに「力こそ正義」であり、「力こそが自分の富と安全を守るもの」といった極端な思想にかたまっていく。そこには人間本来が持っているところとされる、温かさとかやさしさというものが入り込むすきまもない」と述べています。



（過激思想を教育される子供）

最初は宗教の違いから生まれた対立だったかもしれないかもしれませんが、今となっては教えの違いからというよりも、お互いのしてきたことによって恨みが募ったことによる争いなのではないでしょうか。

狐野氏は以前下宿してお世話になったイスラム信者の方から、「留守だから自分の家だと思っただけ滞在しなさい」と鍵を渡されたそうです。異教徒でも、彼らの宗教を尊重する限り彼らは心を開いて親切にしてくれる、それは先に述べた『クルアーン』の受け取り方によって変わってくるものなのでしょう。

さらに狐野氏は、イスラームの教えと浄土真宗との類似点を挙げています。「イスラーム」というアラビア語の意味は「帰命」、神の名を唱えることによって、名を通して神が人に語りかけます。これは真宗における「南無阿弥陀仏」と似ています。人間を生かそうとするいのちのはたらきに感謝することも同様です。ただやはり、アッラーは唯一絶対の創造神。仏教では創造神はおらず縁起の世界、世の中を善と悪というような二元対立的に区別された状態にあるのではないと考えます。お互いが唯一を主張すると争いになることは避けられません。仏教の「智慧」の教えを身につけることによって世界で日本人が活躍する、イスラームの問題にも何らかの役割を果たせるように期待しておられます。

続いて、各宗教者の声（『中外日報』より抜粋）を紹介します。

●名取芳彦氏（真言宗豊山派）「仏紙掲載の風刺画はヨーロッパのイスラームに対する差別意識によるものだろう」。

●玄侑宗久氏（臨済宗妙心寺派）「風刺画どころか、具象としての絵そのものが禁じられる社会で、ムハマンドが描かれることは想像を絶することだ。各種のタブーは別な文化圏の考え方としてもっと尊重されなくてはならないと思う」。

●西原祐治氏（浄土真宗本願寺派）「暴力の背景に、不平等や貧困、差別といった構造的な問題がある。それを理解して日常的にもっと関心を持つべきだ」。

●野田大燈氏（曹洞宗）「日本でも戦国時代の一向一揆のように宗

教が武装して戦鬪を繰り広げたこともあり、どの宗教も武力行使の可能性を秘めている」。

●田畑文正氏（同朋大特任教授）「宗教の大事な意味は、絶対的な神や仏を通して人間の弱さを学ぶことにある。特に仏教からは、強さを誇るのではなく、『弱さの連帯』を提案できるのではないか」。

●谷山洋三氏（東北大准教授）「ムスリム人口が九割のバングラデシュで、ムスリムと仏教徒では『こんにちは』に相当する挨拶言葉が異なり、お互いに相手の使う挨拶をするという光景が日常だった。互恵関係を保つための、素晴らしい知恵だ」。

●松本紹圭氏（浄土真宗本願寺派）「宗教に対する誤った教育を押し付けられた子どもたちがテロや戦争に巻き込まれていく現状を、ムスリムもとても憂いていた。今後、世界的に宗教教育が重要になってくる。特定の宗教・宗派の教えを説くことよりも、普遍的なりテラシー向上に責任を持つような宗教者が強く求められる」。

世界宗教者平和会議日本委員会はイスラム国に対して、宗教の名を騙り、宗教をいわばハイジャックして悪用した行動と非難し、イスラーム世界の宗教指導者と対話を重ね、「イスラームは非暴力と平和の宗教である」というメッセージを出しています。多神教的風土の日本が唯一絶対の神を信じるイスラームを受け入れにくいとの意見があります。しかし、相互交流の機会を持ち、個人的信頼関係を築くことから、お互いの宗教、考え方に対する尊敬の念が生まれ、以前は不可解に感じたことが少しずつ理解できるようになる可能性があるのです。

以上、諸賢のことばに頷かされます。問題を生み出している原因である貧困と差別、圧政の撲滅。宗教を含めた自由な教育環境の整備。そして、怨みを増長させる報復をいかに止めるか。仏教徒である私たちも共に考えていかねばならないと思つたことです。

## 納骨堂が美しく

納骨堂の荘厳がまだ十分でないので整えたい、と前任職が業者を呼んでから二週間ほどで突然の往生。それを遺言と受け止め、この度、御本尊の後背新調、釣り灯籠と瓔珞の取り付け、堂内正面の金紙張りを行いました。より一層美しくお飾りされた納骨堂に是非お参りください。

## 報恩講報告

一月十二日、晴天に恵まれ賑やかに報恩講が勤まりました。法話は秋山和信氏による「節談説教」。仏教をわかり易く伝えるために話す文句（説教）に抑揚（フシ）が付けられ、人びとの情念に訴えかけるように工夫されたものです。江戸時代に流行し、廃れていきましたが近年復活の兆し。「南無阿弥陀仏の六字は阿弥陀さまのお呼び声」と朗々と響き渡り、お参りの方も乗せられてお念仏。「素晴らしかった、CDが出たら買うわ」との声。法話としてだけでなく話芸としても楽しまれたようでした。後にこの節談説教が基になって浪曲、講談、落語などが生まれており、節談は話芸の源です。落語には仏教をネタにしたものもあります。難しく考えずに一度、お説教を聞いてみるのも面白いかもしれません。

（築地本願寺で行われた節談説教大会のDVDがあります。ご希望の方にはお貸ししますのでお申し出ください）

